

# 札響くらぶ

69

【編集・発行/札響くらぶ】 064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札幌交響楽団事務局気付  
メール：information@sakkyoclub.net  
ホームページ：http:sakkyoclub.net/sakkyoclub/

2015.1



## JOFCC in 山形2014に参加して

11月23日(土) 12:30 山形テルサ2Fリハーサル室

今年の日本プロオーケストラファンクラブ協議会(JOFC)の総会は、山響ファンクラブの主催で山形市で開催された。

総会は、NHK大阪放送局の山田朋生アナウンサーが司会兼議長として開会を宣言、上田JOFC会長(札響くらぶ会長)が歓迎のあいさつ、続いて西川JOFC幹事長(札響くらぶ副会長)が仙台フィルハーモニークラブ(SPC)、群響ファンズ、石川県立音楽堂楽友会、名フィル・ファンクラブ、



園部山響協合理事長 高橋山形県企画振興部長 西川JOFC幹事長 上田JOFC会長

広響フレন্ズ、都響倶楽部(オプザバー)参加、札響くらぶ、山響ファンクラブの順に参加団体を紹介し、司会から来賓として、山形交響楽団音楽監督飯森範親氏、山形交響楽協会理事長園部稔氏、山形交響楽協会専務理事斎藤正志氏が紹介され、山形県企画振興部長高橋氏は挨拶の中で吉村山形県知事のメッセージを代読、続いて山形交響楽協会理事長園部氏があいさつを行い、議題審議に移った。各クラブからアンケート形式で取りまとめた活動報告を集計して武藤JOFC事務局長から「会員数と動向」「運営」「実施事業」「会員特典」「楽団支援事業」について総括、報告が行われた。JOFC会長などを顧問に就任するため、日本プロオーケストラファンクラブ協議会会則の一部改正がJOFC事務局から提案され、満場の拍手で採決された。今年の総会は4年に1度の役員改選があり、会長に代わってJOFC事務局から人事案が提案され、次のように承認された。

- 東海林雅子(山響ファンクラブ会長) 新任
- 小野善平(群響ファンズ会長) 再任
- 石井慎一(名フィル・ファンクラブ代表幹事) 新任
- 幹事長 西川吉武(札響くらぶ副会長) 再任
- 幹事 佐藤佳世(SPC事務局長) 再任
- 保科 誠(山響ファンクラブ事務局長) 再任
- 石守 晃(群響ファンズ事務局長) 再任
- 山田博子(名フィル・ファンクラブ代表幹事) 新任
- 静岡俊郎(石川県立音楽堂楽友会代表幹事) 再任
- 佐藤幸一(広響フレন্ズ) 再任
- 事務局長 武藤義典(札響くらぶ事務局長) 再任
- 顧問 工藤一郎(SPC顧問) 新任
- 加藤 聡(山響ファンクラブ顧問) 新任

新任役員を代表して工藤顧問が挨拶を行った。これまで各クラブからそれぞれの活動報告を行っていたが、今回はいくつかのテーマを設定してグループトークするJOFC Cafeに参加する者とゲネプロ見学に参加する者が各グループに分かれることとし、終了後グループ発表することとした。



JOFC Cafe 全景

- JOFC Cafeは次のテーマに分かれてそれぞれ話し合った。
  - A・1 イベント企画
  - A・2 イベント/会報
  - A・3 会報/広報
  - A・4 楽団支援/物販/その他
- 最後の議題となる次回開催地について高崎と発表され、開催地の小野群響ファンズ会長(JOFC副会長)が来年11月21日(土)を予定していると受託あいさつを行った。これで全ての議題が終了し、長島JOFC副会長の閉会のあいさつで閉会、最後に全員で記念撮影を行い、山響定期演奏会会場へと向かった。



総会参加者全員で記念撮影



# Xmasパーティー開催

12月13日 (土) 16:30  
テラスレストラン・Kitaraにて

今年も12月の定期公演の終了後にクリスマスパーティーがテラスレストランキタラで開催されました。

総勢40人ほど、札幌からは小沢専務理事をはじめ、市川事務局長、コンサートマスターの大平さん、田島さん、打楽器の大垣内さん、トランペットの前川さん、ヴァイオリンの小林さん、河邊さん、ヴィオラの物部さん、チェロの猿渡さん(親子3人で)が参加してください大感激。会員では、顔なじみが多い中で、初めて参加される方も何人かいらっしゃって、大変嬉しく思いました。

上田会長のあいさつの後、楽譜支援金贈呈のセレモニー、小沢専務理事のごあいさつと続き、乾杯は、今年札幌に戻ってこられた田島さん。10年ぶりとなる札幌について、感慨深く語ってくださいました。また、今年の「札幌文化奨励賞」を受賞された八木先生にお祝いの花束をお贈りしました。

あちらこちらで、話に花が咲き、写真撮影やサイン会など和やかな

## Xmasパーティー写真集

雰囲気の中、楽員さんにコンサートの告知などスピーチもしていただきました。そしてサンタさんも登場して恒例のビンゴゲーム。大いに盛り上がったところでパーティーもお開きとなりました。初めて参加された方は、「楽員さんと一緒に写真を撮ってもらえるなんて！ また、是非参加したいです。」と喜んで帰られました。札幌の素晴らしい演奏に酔い、そしておいしい料理やワイン片手に同好の士と語り合うことができ、最高の一日となりました。(定政)

写真1列目：開会あいさつの上田会長、楽譜支援金の目録を受け取る小沢専務



写真2列目：楽譜支援金のお礼あいさつの小沢専務、乾杯をする田島コンマス、乾杯、小林ヴァイオリン副首席、3列目：コンサートの紹介をする猿渡チェロ副首席、同じく物部(ヴィオラ)さん、札幌文化奨励賞受賞のお祝いの花束を受ける八木道作曲家協会会長(札幌くらぶ会員)、談笑する参加者①、②



写真4列目：談笑する参加者や楽員さんのサインをもらう参加者①、②、③、④、5列目：サンタの衣装でビンゴゲームの進行をする上野事務局次長、ビンゴゲームを楽しむ参加者(パノラマ写真)

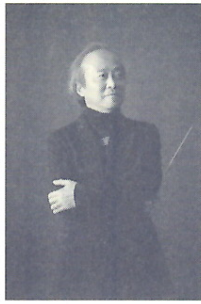


# 2月の定期・名曲シリーズ演奏会

八木 幸 二 (札幌くらぶ会員、北海道作曲家協会会長)

## 森の響フレンドコンサート

札幌コンサートホール大ホール  
指揮/尾高 忠明  
ヴァイオリン/成田 達輝



尾高 忠明 © Martin Richardson



成田 達輝 © Masahiro Ogata

## メンデルスゾーン/ヴァイオリン協奏曲ホ短調

モーツァルトのような天才肌の作曲家メンデルスゾーンは、恵まれた家庭に育ち、経済的にも豊かで他の作曲家に比べ苦勞知らずのように思われがちだが、ユダヤの家系のためか差別と迫害を受けていたらしい。そんな彼の作品の中でも最も有名なこの協奏曲は、6年の歳月を費やした晩年の作品。ロマン

的情緒と均整のとれた形式美は、メンデルスゾーンのすべての作品に通ずる特徴だが、これほどじっくりと調和した作品はないのではない。哀愁と情熱を伴った美しい旋律は、メンデルスゾーンの内的な悲しみを表現しているのかもしれない。爛熟したロマン的雰囲気心地よい流動感を断ち切らないために、三つの楽章は中断することなく演奏され、これは当時としては新しい手法であった。しかし、各楽章は素材で有機的に関連しているわけではなく、それぞれ独立してひとつのまとまりを保っている。今回は、札幌出身で若き俊英、成田達輝がどんな音色でこの名曲を奏でるか、大いに楽しみなプログラムだ。

## ラフマニノフ/交響曲第2番ホ短調

交響曲第1番が不評に終わった中、ラフマニノフは神経衰弱を克服しながら、ピアノ協奏曲第2番でグリンカ賞を勝ち取り成功を収める。自信を持ちながらつくり上げたこの曲は、彼の3つの交響曲中、もっとも広く親しまれるようになった名曲だ。全体的にラフマニノフ特有の饒舌さがあり、構成的には息の長い起伏のうちに情緒的な曲

の運びを見せる独特の構成を示し、叙情的にかつおおらかに曲を動かすと言う点で、彼のピアノ協奏曲第2番とのスタイルにおける共通性を感じさせる。ロシア音楽が濃厚に感じられる美しい旋律が、うねるように展開しロマン性に満ち溢れている。いくぶん陰鬱な気分からはじまる第1楽章は、全曲を通して重要な役割を果たす動機がいくつか内包され、展開部では導入部の動機が變形しながらイングリッシュホルンが第1主題を奏で再現部に向かつて劇的高揚感をつくり出す。第2楽章は、覇気のあるホルンの主題に始まるスケルツォで、第3楽章のクラリネットのメランコリーな音色を聴くと涙腺がゆるんでしまいそうになるのは筆者だけではないだろう。終楽章は、それまでの主題や動機が再現されつつ高らかに勝ち誇ったように曲を閉じる。指揮をする尾高忠明が、その洗練された音楽性で「メンコン」を含め、どんなロマン性を引き出してくれるのか大注目のマチネーだ。

シベリウスが癌の恐怖におののきながらつくられた交響曲第4番は、内向きでほの暗い雰囲気を持つていたが、それとは対照的なのが交響曲第5番である。この曲は、作曲家の50歳の誕生日を記念する祝賀演奏会において新作としてつくられた。しかし、初演作に満足しなかったシベリウスは、その後2度の改訂をおこない、3楽章による1919年版が、現在では演奏されている。初稿版と比べると、金管楽器が活躍し壮麗さが増し、フィンランドの早春の気配を吸い込みながら、それまでの病の苦痛からようやく外の自然界に心を向けた開放的な作品となつて作曲家特有の田園的な情緒が甦っている。第1楽章の中に通常のソナタ形式の楽章とスケルツォを包括しているのが特徴で、しか

交響曲シリーズ63  
2月13日(金) A日程19:00  
2月14日(土) B日程14:00  
札幌コンサートホール大ホール  
指揮/尾高 忠明



尾高忠明指揮、札幌交響楽団

## シベリウス/交響曲第5番変ホ長調

それが自然に結合され性格的一貫性の中にひとつの対照感を生み出している。第2楽章では、主題と変奏が自由な手法で展開され、第3楽章では新たな主題を加えながら高揚感を感じさせる運びとなっている。2000年4月札幌定期での岩城宏之による第5番は、名演として記憶に残っているが、シベリウス音楽に精通する尾高忠明のシベリウスも期待が膨らむ。

シベリウス/交響曲第6番二短調  
交響曲第5番の作曲中に書き始められたこの曲は教会旋法のひとつドリア調が全曲の基になっている。それは、作曲家が教会音楽に対する単純な懐古や憧れを意味するものではなく、フィンランドの伝統的な民謡音階が教会旋法に近いことである。そのためか北欧の森を想起させるような瞑想的な第1楽章や美しい主題を持った緩徐楽章など、ドイツ・ロマン派音楽とは趣が異なる雰囲気を持つている。交響曲第7番と併行して構想されたと言われている第1楽章の冒頭に現れる主題が全楽章を支配し、循環形式を越えた緻密さで、その有機的な構成力の見事さは作曲家の卓越した作曲技法の頂点を垣間見せるものである。第1楽章はドリア調の主題にはじまる自由な形式で瞑想的な雰囲気が聴き手を魅了することだ

ろう。恬淡ともいえる緩徐楽章を経て第3楽章は、教会調のひとつドリア調でつくられ独特の雰囲気醸し出す。孤独な魂をうかがわせる深い内容を持った終楽章は、ティンパニの弱奏によるトレモロを背景に弦楽器が静謐に全曲を閉じていく。

シベリウス/交響曲第7番八長調  
シベリウス交響曲の頂点とも言われる第7番は、第6番とほぼ併行して構想が練られ、第6番が発表された翌年の1924年に完成されている。初演はヘルシキにおいて、作曲家自身の指揮でおこなわれた。翌年名曲交響詩「タビオラ」を作曲した後「沈黙の30年間」と言われる期間、彼は92歳で亡くなるまで、あまり作品を残していないため、作曲生活の最後期の作品と言える。単一楽章の形をとり、はじめは交響詩的な作曲意図があったようだが、全体の構成は4楽章制の交響曲形式で、それぞれの部分の主題、動機、楽節は密接に関係している。冒頭の音階的上昇句とトロンボーンによる主題などを中心にくわめて有機的にすすめられ、中間にスケルツォ風の楽想や田園調の旋律の展開がある。最後は、雄大な楽想で、激しい調性の変化を経て曲は昇華していき、第6番同様シベリウスの円熟した作曲技法が存分に発揮された名曲であることに間違いなし。

(写真協力/札幌交響楽団)



♪ 楽員さんに 興味津津！ ④ ♪

### ♪ ヴァイオリン副首席奏者 小林美和子さんに聞く

## ♪ 音楽が大好きな父に

生まれは茨城県の水戸ですが、父の仕事（外科医）の関係で1歳から15歳まで和歌山県、その後千葉県に移りました。

父は大学時代にヴァイオリンを始めたそうで、家には集めたレコードがたくさんありました。「プロにはなつてほしくないけれど、大人になった時に楽しみに弾けるといいね」と、子供達にもヴァイオリンを習わせてくれ、いい演奏会があると私達をはるばる大阪まで連れて行ってくれました。

私がヴァイオリンを始めたのは4歳。姉のレッスンについて行く

て、「私もやりたい！」と言ったのを覚えています。姉は今、都響でヴァイオリンを弾いています。私はスポーツも好きだったので

## ♪ 尾高先生と最初の出会い

小学校4年生から6年生まで、毎週大阪にある相愛大学の「子供のための音楽教室」に通い、ソルフェージュと弦楽合奏の授業を受けていました。その定期演奏会では毎年尾高先生が振つて下さるのですが、先生は私達を子供扱いせず、一人の音楽家として接して下さいました。私達はみんな、素敵

な尾高先生が大好きでした。昇立高校時代、父からは「食えない音楽家の道は姉一人です。なんだからお前は普通の道に行つてくれ」と釘を刺されていました。でも、先生達は当然音楽に進むの

だろうという感じで、もう完全に音楽の道へのレールが敷かれていましたね。それでも私の方は、絶

対に音楽で生きていく」とは全く思っていませんでした。芸大に入つてからは、小さい頃から弦楽合奏やアンサンブルが楽しいと思つていたので、オーケストラに入つてやっていたいと思つた。然し思うようになり、仲間達と東京ユースオーケストラを作つて定期的に練習をし、演奏会も行っていました。

テレビではベルリンフィルなどの演奏が盛んに放送されていて、「この中の一人として演奏するの

は夢かなあ」と思い、その時ついていたゲルハルト・ボッセ先生に、「ドイツに行つて勉強したい」と相談したら「ドイツの音大には今、ロシアや東ヨーロッパの先生しかない。僕のもとでもう少しやりなさい」と言われました。それでもまだ若く生意気だった私は「もっといろんな違う世界を見てみたい」と反発し、とうとう先生に「分かった。ドイツに行きたいのなら行きなさい。でも、僕はその為の手助けはしないよ」と言われました。

## ♪ トレチャコフ先生の音楽に衝撃

それからは向こうの知り合いに音楽雑誌を送つてもらつたり自分で調べたりして、色々な講習会や音楽祭に参加しました。その中でトレチャコフ先生とブランデイス先生に出会い、「今のぬくぬくした自分から抜け出して、もっと勉強したい」といつそう強く思うようになりました。

先生は明らかに西側の人とは違う厳しい雰囲気の方でした。初めてレッスンを受けた時、私のヴァイオリンと弓を渡したら、弾いた瞬間に松ヤニの粉がパッと散つて、自分の楽器とは思えない、今までに聴いたこともない、力強いけれど温かい音楽が聴こえてきました。すごい、これだ！目から鱗が落ちる思いがしました。

それからはロシア系のヴァイオリニストのレコードやCDをよく聴くようになり、その中にトレチャコフ先生の演奏もあったのです。今思えば、その名前がずっと心に残つていたのかもしれないね。

## 生きた音楽を届けたい



### プロフィール

音楽学部卒業、ドイツ・ケルン音楽大学大学院修了、同大学で音楽教育のソリストと、ミラノ市姉妹都市親善使節アンサンブルのコンサートに出演。また芸大在学中より、葉山町の演奏会に出演。また芸大在学中より、葉山町の演奏会に出演。また芸大在学中より、葉山町の演奏会に出演。

これまで教えていただいた先生は素晴らしい方ばかりだったので、私をお客さんとしてしか見ていない感じでした。上手にいい所を引き出して、「でも、ここがちよっとね」という無難なレッスンはもうつまらなかつたのです。

ロシア人のトレチャコフ先生は明らかに西側の人とは違う厳しい雰囲気の方でした。初めてレッスンを受けた時、私のヴァイオリンと弓を渡したら、弾いた瞬間に松ヤニの粉がパッと散つて、自分の楽器とは思えない、今までに聴いたこともない、力強いけれど温かい音楽が聴こえてきました。すごい、これだ！目から鱗が落ちる思いがしました。

それからはロシア系のヴァイオリニストのレコードやCDをよく聴くようになり、その中にトレチャコフ先生の演奏もあったのです。今思えば、その名前がずっと心に残つていたのかもしれないね。



5年生の定演で尾高先生と。中央左の立っている女の子が私。



りたい」と言っておけばよかったのですが、喜怒哀楽の激しい方だったのでうまくやっついていく自信がなく、その時はお願ひする決心がつかせませんでした。でも、時間が経ってもやはりトレチャコフ先生を諦められず、ケルン音大の大学院の願書に「第一志望プロフェッサー・ウィクトール・トレチャコフ」と書きました。

試験で弾き終わるとヴァイオリン主任のコシユダ先生がいらっしやって「実技は問題なく合格なんだが、トレチャコフのクラスは10人の定員いっぱいだから今は入れない。いずれ君が彼のクラスに入れるように、まずは僕のクラスに来ないか」と言っておきました。それから一年半後、トレチャコフ先生から電話がかかってきて「おめでどう。私のクラスに来なさい」と。ようやく念願の弟子になることができました。

### 熱く厳しい指導に涙が

まさかあの年になってレッスンで泣いてしまうとは思いませんでした。先生にほめられたら、先生の求める演奏ができる様になりたいと思うのに、期待に全く応えられない自分が悲しくて情けなくて。生まれて初めて心底上手になりました。と思います、もう夢中で練習しました。大学院では先生のレッスンとオーケストラや室内楽の授業もあり、余裕はなかったけれど、毎日が新鮮で充実していました。自分のマン

ションではクレームが来て練習できなくなつたので、学校の練習室をなんとか確保して、一日中そこ

## ♪ 念願のドイツのオケに

その頃には私の目標ははっきりしていました。オケで弾くこと。そのための実習期間を経て、運良くボンのベートーヴェンハレに入り、毎晩のようにたくさんのおペラを弾いていました。その後、オズナブリュックのオケに首席として移り、いろいろな経験を積みまし

た。彼らは個人個人の意志・主張がはざりしているの、それらを尊重しつつかに調和を保つか、とてもエネルギーの要る現場でした。休憩時間に見解の違う2人が激しいディスカッションをしていて一見険悪な雰囲気になっていて

も、練習が終わると仲良く一緒に

にこもって練習していました。周りには優秀な若い子達がたくさんいて、いい刺激になりました。

帰って行ったりして、仕事をブライベートに持ち越さない、はっきり分けている、というのが日本とは違うなあと感じましたね。

最初の目的がある程度なかった時点で今後の自分の人生についてふと考えた時、60歳までこの国でこのオケで、この仕事をして生きて行くのかと考えたらやっぱり違うかなと。ドイツに行つたばかり

## ♪ 札幌が私のターニングポイント

とにかく自分らしくいられる場所を探そうと帰ってきましたが、10年ぶりの日本は、新しい世代の人たちが中心になっていて、どんどん変わる時代のスピードなど以前の環境との違いに、すっかり浦島太郎になつたような気分でした。オケに入る気は全くなく、音楽以外の世界も知りたいと思うようになりました。

そんな時、いつも応援してくれていた祖母が認知症になり、どう対応したものか悩んでいたで介護ヘルパーの資格を取ろうと学校に通い始めました。と、ちょうどその頃、心配していた姉が「札幌のオーデイションがあるよ。受けてみたら」と勧

の頃、何人かの日本の方に「帰り時というのがあるからね。逃すと帰れなくなるよ」と言われたことが、ふと心に戻ってきました。

ドイツのオケは多分世界中で一番恵まれていて、夏休みもちゃんと1カ月半あり、その間も給与が振り込まれ、社会的にも音楽家の地位が高いと感じます。でも、10年近いドイツの生活の中で、何か素のままの私ではいけない、鎧を着ていないと倒されてしまうという感じがいつもありました。姉にも「それ以上ドイツにいて何をやるの？日本でオーデイションを受けるにも年齢制限があるよ」と言われました。

めてくれたのです。資格は取りましたがあのままヴァイオリンを手放していたらやはり未練はあつたはずなので、私にとっては大きなターニングポイントになりました。

中島公園に初めて入つた時、「あつ、ここ知っている！」と思ひました。シトットガルトの歌劇場やバレエハウスのある広い公園

室内楽も好きです。フリーの頃は介護施設でよく演奏していました。クラシックも弾きますが、懐かしい曲や一緒に歌える曲などを弾くと、皆さん一気に顔が明るくなる

## ♪ いつもベストを尽くしたい

そのままだ。木々の感じも奥に広がる池の感じも。札幌に住んだこともないのにとても懐かしい感じがしましたね。札幌の街はコンパクトでどこへ行くにも便利だし、散歩が大好きなのでよく歩いています。子供の時から、家には歴史の本が



ケースには虎の写真が。「虎は凛々しくて、群れないところが好きです」

寺社よく連れて行つてくれました。今も仕事で旅に出ると、必ず城跡やその町の資料館などに行きます。長い休みが取れると、知らない街をぶらぶらと歩き、歴史の面影や美しいものを探すが何より楽しみです。

そのままだ。木々の感じも奥に広がる池の感じも。札幌に住んだこともないのにとても懐かしい感じがしましたね。札幌の街はコンパクトでどこへ行くにも便利だし、散歩が大好きなのでよく歩いています。子供の時から、家には歴史の本が

寺社よく連れて行つてくれました。今も仕事で旅に出ると、必ず城跡やその町の資料館などに行きます。長い休みが取れると、知らない街をぶらぶらと歩き、歴史の面影や美しいものを探すが何より楽しみです。

そのままだ。木々の感じも奥に広がる池の感じも。札幌に住んだこともないのにとても懐かしい感じがしましたね。札幌の街はコンパクトでどこへ行くにも便利だし、散歩が大好きなのでよく歩いています。子供の時から、家には歴史の本が

寺社よく連れて行つてくれました。今も仕事で旅に出ると、必ず城跡やその町の資料館などに行きます。長い休みが取れると、知らない街をぶらぶらと歩き、歴史の面影や美しいものを探すが何より楽しみです。

けて行く意味があるなと思います。私はヴァイオリンが好きというより音楽に携わるのが好きなんです。ヴァイオリンはその手段で、声のように自分の思いを表現することができる。特に私はみんなを支えたり色付けをしたりするのが好きなんです。思えば小さい時からメロディーよりも内声を弾くのが好きでしたね。

東京にもたくさん音楽ホールはあるけれどキラキラほど恵まれたホールはありません。音響はもちろんですし、エントランスから入って指揮者やソリストの部屋、大部屋、ホールまでも、全部が一階にある。しかも、公園の中を通つてそのまま自由に世界を旅することのできる音楽の空間が、街の真ん中のこんな静かな所にあるんですから、ぜひ遊びにいらしてほしいですね。

私たちが楽員も、お客様が耳の肥えた方であっても、初めてクラシックを聴く方であっても、小さな子供さんであっても、同じクリティの精一杯の演奏をしなければと思つています。どんな時でもどんな悪条件であっても、いつも自分達のベストを尽くしたい。目の前で生まれる生きた音ってこんなに素晴らしいんだよということ

を伝えていきたいと思つています。

2014年10月25日  
キララレストランにて  
担当/井上、村山、中居



ベートーヴェンハレのゲネプロ風景



# 札幌初代事務局長 谷口静司さんを偲んで

昨年7月、期せずしてお二人の元事務局長の訃報に接しました。5日には竹津宜男さんが79歳で、23日には谷口静司さんが83歳でお亡くなりになりました。前号には竹津宜男さんを偲んで多くの方が追悼文を寄せておられましたので、ここでは谷口静司さんの在りし日を偲び、まことに僭越ながら多少の逸話などを紹介させていただきますことにしました。

谷口静司さんは、札幌交響楽団50年史(2011年9月発行)によりますと、札幌創立2年目の1962年(昭和37年)から1982年(昭和57年)まで、途中2年間のお休みを挟んで、18年間の長きにわたり初代事務局長を務められ、今日の札幌の礎を築かれた功績には大きなものがあるようです。

谷口さんとの出会いは、今から約15年くらい前になりましたが、友人に誘われて谷口さんが主宰しておられた「さっぽろAVシアター」に出席するようになってからです。この会には札幌くらぶからもご出席の会員があつたかと思いますが、案内文書に、「この会はオーディオ・ヴィジュアル・メディアやクラシック音楽ファンのための催しではありませぬ。社会全般・芸術文化を

考えながら、楽しく豊かに暮らしていこうという人たちと一緒するシアターです(一部省略)」と書かれているとおり、オーディオ新製品による新譜の視聴に留まらず、谷口さんが録画された演奏を視聴してもらったり、とき折々の世の中の動きについての辛口ではあるが機智に富む文明評論も楽しませていただきました。

北海道大学文学部で美学を専攻されただけあって、あるいはそのこととは無関係だったかも知れませんが、厳しい審美眼の持ち主だったように思います。音楽を聴いてそれを評論するには、まず音を正確に耳で聞き脳で聴き取ることが前提とお考えだったようで、傘寿近くになって聴力の不足を感じられたのでしょうか、あるとき精密な聴力検査をしてきたが異常はなかったとのお話を聞きし、さすが感性豊かな一級の音楽評論家と感じ入った次第です。音楽会評や道新のクラシック新譜紹介を定期的に執筆しておられたので、ご自身にも厳しかったのでしよう。加えて音の世界を文字で表現する言語能力の優れた方だったと思えます。楽器演奏や合唱などのご経験はなかつたようで、僕は楽譜は読

めないとおっしゃっていましたが、この世界に身を置く立場としては引け目を感じるといった意味のことを話されたことがありました。

札幌のかつての指揮者として、今は亡き岩城宏之さんについて何度か話題にされました。岩城さんは、谷口さんが事務局長時代に正指揮者として札幌に招聘され、以降32年間の長きにわたり音楽監督あるいは桂冠指揮者として、札幌を今日の演奏水準にまで持ち上げられた大指揮者だけに、いろいろ思い出も多かったことと思えます。また、「最近、札幌は上手くなつた」と一度となくおっしゃっていた

たのが印象に残っています。谷口さんとはシアターでお会いするだけではなく、キタラのロビーでもお話を伺い、一緒に食事をして欲談したこともありです。何時だったか、モーツァルトは2管編成の後期3大交響曲や中期以降のピアノ協奏曲の伴奏もフルートだけは1本しか使用しませんが、これは何故かと質問したことがありますが、その答えは、モーツァルトに聞いて下さいとのことでした。

清純で美しく深く澄みきつた音楽に包まれたご冥福を、心からお祈り申して止みません。(札幌くらぶ会員 川端智太郎)

## ムジカ・アンティカ・サッポロを聴いて

札幌バプテスト教会の礼拝堂は外の寒さをよそに熱気と明るさにつつまれていました。この日の私の目当ては、もっぱら普段あまりお目にかかることのないバロックトランペットでした。

がトランペットと弦楽の合奏。「トリ」に演奏されたヴィヴァルディの「2本のトランペットの為の協奏曲は圧巻で、2本が時に寄り添い、時に掛け合いとなつて、ワクワクする楽しい演奏でした。私にとつては、あのしほり出すような、素朴な高音が何とも言えない魅力でした。弦楽器のガット弦の音色にも耳を傾けていましたが、繊細で古風、宮廷を思わせる雅な響きに聴こえました。土井奏さんのナレーションを交えて演奏された「10声の為のバッタリア」では、モーツァルトの「音楽の冗談」を思わせる部

演奏曲目は7曲、そのうち4曲

分あり、太鼓の代用として白い紙を張ったコントラバスが現れたりして、面白い曲と演出でした。(村山)

## 第574回定期演奏会 札幌練習見学会に参加して

11月13日(木) 11:50~13:00の練習見学会に参加しました。指揮は首席客演指揮者のラドミルエリシユカさんです。2006年12月札幌定期に初登場で衝撃の出会いをきっかけに、1年4か月後には首席客演指揮者に就任され、記者会見やインタビューなど傍でお話を聞きする機会に恵まれ、演奏会もいつも期待以上の感動・感激を与えてくれる素晴らしい方。転勤で札幌を離れて早5年。残念ながら昨年のエリシユカ氏の練習見学会に参加出来なかつたため、今回は万端の日程を調整し神戸よりやってきました。150人の定員いっぱい参加者がキタラホールに集まり、人気の高さをあらためて実感します。練習風景というのは、何度も参加しましたが、今回ほど興味深く音楽を作り上げていく様子をの当たりにしたのは初めてでした。

会場はいつもの通りキタラホールのCBブロック席です。以前は指揮者の肉声の指示の声を聴き取るのは至難の業でしたが、最近はずマイクで集音しており、見学席前にスピーカーが設置されているの初めてのムジカ・アンティカは「古楽の楽しみ」を満喫したひと時となりました。(村山)

初めは指示を出しているのかはつきりと聴こえます。最初にブラームス交響曲第2番の第4楽章を。お馴染みのチェコ語の通訳女性を介して、エリシユカ氏は本番以上に両手を振り上げ、低い声で次々と精力的に指示を出すため、演奏を頻繁に止めます。細かい指示によって曲に命が吹き込まれていくのが実感できます。時には「そのとおりにやったら、本気で怒ります」ときつい言葉もありましたが、楽員の方々の厚い信頼で結ばれている練習風景を見ると、真剣ではあるのですが皆さん楽しそうでした。その雰囲気は見学している私も一緒に、とつても面白かったです。練習は続いて、第1楽章冒頭を少し行い、「魔弾の射手」序曲へ。練習後エリシユカ氏より謝辞の挨拶があり、札幌と札幌・北海道をこよなく愛する気持ちをあらためて聞け、感謝感激。あつという間に至福の時間が過ぎ、本番の演奏会に一層の期待が膨らみました。(神戸市在住スタッフ 深井)



# JOFC in 山形2014 旅行記

札幌からは毎年JOFC（日本プロオーケストラファンクラブ協議会）総会開催地へ訪問しています。2014年は山形で開催され、恒例になったミニ旅は、14名で米沢のまちめぐりと「香坂酒造」への訪問、「幻の銘酒ほろ酔いの旅」となりました。

今回は参加された会員から投稿をいただきましたので掲載させていただきます。

## 「小さな米沢紀行」

晩秋の三連休11/22〜24、JOFCに参加するため、山形に出発した。皆、出発は5〜6時台となり、朝から気合は十分である。JOFCは山形なのに、何故米沢へ？ そう、今回は、総会は23日なのだが、秋の行楽シーズン、しかも連休、ただ山形のホールやホテルに明け暮れるのもつまらない、山形近くの米沢市でプチ観光と洒落こもう！ ということになったのだ。米沢市は米沢牛や米沢織りでも有名であるが、歴史的にも名高く、大河ドラマでお馴染みの独眼竜は伊達政宗、土地人は上杉謙信、景勝、そして江戸時代米沢藩の救世主、鷹山の活躍した地である。謙信を祀る上杉神社エリアにあ



米沢市複合施設「伝国の杜」

る複合施設「伝国の杜」は平成13年に来たばかりの新しさ、歴史的ひなびた感？ を期待していた私たちにはいささか残念であったが、能舞台もあるホールに博物館や情報センターを備える立派な複合施設である。入ってすぐには、真新しい金色にさえ輝く圧巻の能舞台。こども狂言くらぶのちびっこが練習をしている。ちびっこ、と言ったことを後で訂正せねばならぬ見事な謡、そしてそれ以上を求める先生の厳しめの姿勢に、子供のための教室にとどまらぬ米沢の伝統への誇りを見る思いがした。博物館では、目玉の国宝「洛中洛外屏風（上杉本）」が待っていた。その昔、織田信長が謙信に贈ったとされ、当時から各地にある数々の同図の中でも群を抜く見事さ。虫眼鏡片手に一日眺め尽くしてみたい



上杉神社

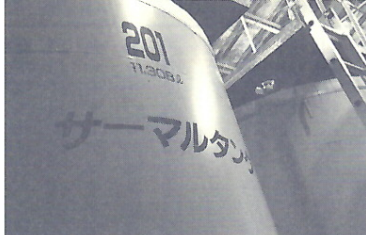
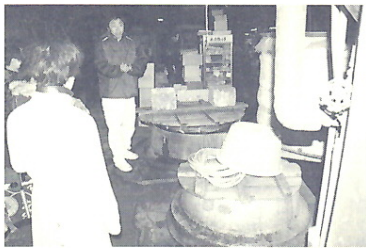


杉鷹山公の像前の参加者

ものと皆が思うイッじであった。上杉神社は米沢城址にあり、小さなお堀が良い風情である。お堀には丸々太った鯉が無数に泳いでおり、橋から下を伺うとどんどん集まって大漁状態になる。全く寒さ知らずの鯉たちであった。橋を渡り伊達上杉の石碑が立ち並ぶ奥に社が、謙信が祀ってあった。戦いに明け暮れた謙信をお参りしながら、平和を享受出来る現在のあ

りがたみを感じたりした。垣根の隙間から、山形に多い黄色やオレンジではない、夕陽に照り映える真っ赤な紅葉にしばし見とれ、ささやかながら紅葉狩りも楽しめた。一行はひとまずホテルへ戻り、身支度を整えてから夜のお楽しみ（？）「酒蔵見学と食事会」に向かった。山形は東北の地に漏れず酒の名産地。県内に54もの酒蔵があり、米沢にもいくつもある。そのうちの「香坂酒造」にお邪魔した。北海道では札幌の丸井百貨店でしか手に入らない幻の銘酒「香梅」の蔵元なのだ。陽も暮れかけた暗がりには、旧い銭湯かと思える木造旧家屋と煙

突が、中は約100年前の古民家しかない、太く不揃いな梁が何本もあり、奥には大きな2mはあるタンク（容量1万2千リットル）など！ いくつもあった。仕込み米を手洗したり、広く知られるよりは知る人ぞ知る酒蔵にしたいという姿勢に、建物と同じ故き良き真摯な職人魂がある蔵元である。仕込みは真冬に屋根雪の湿度や温度を利用して作る為、今回は実際の工程は見られず残念だったが、若い経営者ながら、一行の質問に裏話まで丁寧な説明を下され、皆満足であった。「香坂酒造」のご紹介の居酒屋で、いよいよ幻のお酒を頂く。最



右：香坂酒造前で酒蔵の見学の手順を説明する香坂常務（中央）、左上：酒米を蒸す釜で準備中、酒を貯蔵する温度管理などができるサーマルタンク（1万2千ℓ弱保蔵できる。）



香坂酒造差入れの「香梅」(右)とそれを楽しむ参加者



初の口当たりの良さは水のように。本当に軽い飲み口と言った皆口々に「危険だ！」と言っては飲み干していた。旨い酒と料理に舌鼓を打ち、仲間たちとぎやかに語り、一日の疲れも吹っ飛ばす本当に楽しいひとときとなった。米沢には他にも米沢織りや民芸館、明治時代の建物が残る旧米沢高等学校（現山形大学工学部）、法律を学んだ人の聖地、民法学者我妻榮の生家もある。午後からの小さな旅だったが、歴史と文化に彩られた町の良さを今味わうことに、名曲に通ずる懐の大きさを思う。皆の万歩計は平均1万1千歩。驚きながらも納得の歩数、一日の勲章でもある。（横浜市札幌くらぶ会員 辻）



# 随想 本棚の隅から 10

1年はあつという間に過ぎる。もう新年の抱負などなく、今年も何事もなく静かに過ごしたいと願うだけ。

冬籠りはストーブのそばでぬくぬくと思い出に耽って過ごすのが習わしになってしまった。

今回は素敵な思い出の一つレニングラード・フィルハーモニー交響楽団のプログラムを取り出して一人悦に入る。

レニングラードフィルハーモニー交響楽団の設立は1882年で宮廷管弦楽団であった1917年ロシア革命でめまぐるしく改称されたが、1938年エフゲニー・ムラヴィンスキーが常任指揮者・音楽監督になり以後50年間その座を維持しソ連のトップ、世界屈指のオーケストラに育て上げた。

1991年ソ連邦崩壊でサンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団と改称された。レニングラード・フィルハーモニー交響楽団・日本公演

1977年10月13日  
北海道厚生年金会館  
指揮 マリス・ヤンソンス  
独奏 ヴィクトル・トレチャコフ  
曲目 シチエドリン

オケストラのための協奏曲  
「愉快なチャストウスカ」  
チャイコフスキー  
ヴァイオリン協奏曲  
二長調 作品35  
ドヴォルザーク  
交響曲 第9番 木短調  
作品95「新世界より」

まさにレニングラード・フィルハーモニー交響楽団の全盛の時だった、初めて音楽の美しさに衝撃を受けた。  
私があまりにも素晴らしかったと絶賛したので、若い友人で北大オーケストラに所属していたヴィオラとチェロの学生は実家が首都圏だったので東京まで聴きに行つた。やはり興奮して帰ってきた、2人の演奏の腕が上がったかどうかは知らないが、彼女が毎日のように私の部屋で弾いているピアノの音に艶が出たのは確かだった。  
その二年後  
レニングラード・フィルハーモニー交響楽団・日本公演  
1979年5月18日  
北海道厚生年金会館  
指揮 アルヴィド・ヤンソンス  
独奏 ヴィクトル・トレチャコフ  
曲目 ベートーベン

「エグモント」序曲  
ブラームス  
ヴァイオリン協奏曲  
二長調 作品77  
ベルリオーズ  
幻想交響曲 作品14  
2度ともムラヴィンスキーは札幌まで来なかったけれどヤンソンス親子（マリスが息子）の指揮を聴くことが出来た。  
振り返れば良い時代を過ごしてきたものだと思う、冬晴れも風の冷たさも変わらないこの街で。  
(井上明子)

## スタッフの活動報告 (平成26年10月～12月)

●札幌くらぶサロン実行委員会  
10月14日(火) 18:00～19:30  
エルプラザ2階打ち合せコーナー  
担当・参加者/上野次長他4名  
第9回のプログラムと10回以降の打合せをしました。  
●加藤JOF副会長が来札  
10月22日(水) 11:00  
札幌市長室  
担当・参加者/西川副会長他1名  
加藤JOF副会長(山響ファンクラブ顧問)が見えられ午前11時に上田札幌くらぶ会長(札幌市長)を訪ねられ、11月23日(日)のJOF C山形総会への出席を要請されました。  
●会報「札幌くらぶ」第68号発行  
10月22日(水) 18:00～20:00  
札幌コンサートホール2階大会議室  
担当・参加者/今井事務局次長他10名  
会報「札幌くらぶ」第68号を800

部発行しました。午後2時から発送作業を行い、会員、札幌関係報道関係に配布しました。  
●第7回札幌くらぶ運営会議開催  
10月22日(水) 18:00～20:00  
札幌コンサートホール2階大会議室  
担当・参加者/事務局次長他14名  
第7回札幌くらぶ運営会議を開催、会報第68号、会報第69号の構成、練習見学会、Xmasパーティー、札幌くらぶサロン、中学生招待事業、JOF C山形総会などについて協議しました。  
●黒田氏来札  
11月10日(月) 15:00～18:00  
エルプラザ2階打ち合せコーナー  
担当・参加者/佐藤事務局次長他2名  
関西フィル定期会員の黒田純平氏がファンクラブ設立に関し来札し、札幌くらぶの西川副会長他2名が情報提供をしました。

●札幌くらぶサロン実行委員会  
11月10日(月) 17:00～18:00  
ホテルオークラカフェラウンジ  
第9回のミニコンサートについて河邊さんと演奏曲目の打合せをしました。  
●第8回札幌くらぶ運営会議  
11月19日(水) 18:00～20:00  
札幌市役所12階1号会議室  
担当・参加者/事務局次長他14名  
第8回札幌くらぶ運営会議を開催、会報第69号掲載記事Xmasパーティー、尾高音楽監督に感謝する会(仮称)、札幌くらぶサロン、中学生招待事業などについて協議しました。  
●Xmasパーティー開催  
12月13日(土) 16:30～18:30  
テラスレストラン・キタラ  
担当・参加者/定政事務局次長他30名  
会員、楽員併せて40名ほどが参加、楽譜支援金の目録贈呈のセレモニーや参加した楽員のコンサート発表、サイン会が行われた後、ビンゴゲームを実施、早々に出席したビンゴに会員が持ち寄った景品を選んでは、大いににぎわいました。  
●第9回札幌くらぶ運営会議  
12月22日(水) 18:00～20:00  
エルプラザ2階18人用会議コーナー  
担当・参加者/事務局次長他12名  
第9回札幌くらぶ運営会議を開催、「尾高音楽監督、ありがとう!!」ほかについて協議しました。

## 編集後記

◆札幌と札幌くらぶの交流会クリスマスパーティーにたくさんのお仲間さんが来てくれました。ビンゴゲームとサイン会も盛り上がりサントさんも興奮していたようです。交流会、とっても楽しいですよ。(上野)  
◆皆様は今年一年、どの様な目標を計りましたか？  
私は昨年の苦い経験から、飲酒を「程々に」楽しみたい。「静かにCDを聴く穏やかな日々」を過ごしたい。  
でも、名曲を聴く刻のウキウキ、逆に増えそうかも。(なお)  
◆定期公演の前後のお楽しみは中島公園のピロムナードである。昨年の秋の紅葉は素晴らしかった。雪の華の後は春、最近知ったが垂れ桜もあるそう、桜好きの私にとって楽しみがまた一つ増えた。(今井)  
◆「本棚の隅から」も今号で10回目を迎えます。年代物の彼女の本棚にはまだまだ沢山の思い出と人生が積まれています。(横山章子)